第１回塩竈市総合教育会議　概要報告

1.　日　時　　令和８年１月 21 日（水）
　　開会　14 時 30 分　　閉会　16 時 00 分

2.　会　場　　塩竈市魚市場中央棟２Ｆ・大会議室

3.　出席者　　塩竈市長　　佐藤　光樹
　　教育長　　黒田　賢一
　　教育長職務代理者　　髙橋　輝兆
　　委員　　松田　攝子
　　委員　　菅井　信吉
　　委員　　佐藤　　香（欠席）

（事務局）
　　総務部　　本多　裕之
　　総務部　　布施　由貴子
　　総務部政策課　　引地　洋介
　　総務部政策課　　齋藤　亨
　　教育部　　末永　量太
　　教育部教育総務課　　櫻下　真子
　　教育部教育総務課　　川﨑　博宣
　　教育部学校教育課　　岩渕　克洋
　　教育部学校教育課　　小川　真樹
　　教育部生涯学習課　　郷古　勝浩

4.　次　第　　議　事（1）学校規模の適正化等に向けた取組について
　　（2）寺子屋しおサポについて
　　その他（1）塩竈市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について

5.　概要

〇開会

〇市長あいさつ

〇議事

（１）学校規模の適正化等に向けた取組について

会議資料に基づき、岩渕学校教育課長から「学校規模の適正化等に向けた取組について」を説明。

【主なもの】

〈松田委員〉これだけ多くのアンケートを集計したが、残念ながら保護者が少ない。子どもたちのことを考えれば、もっと保護者の意見を聞く必要がある。令和７年２月に出た資料の学校施設の現状を見ると、子どもたちの学力・精神面の自立のために早急に方針を決めていく必要がある

〈岩渕課長〉今後も議論を進めていくが、令和８年度には複数の具体案を提示し、それをもって、できていないところも含めて意見交換会でご意見をいただき、最終的には３年度以内には方針を提示できるようにしたい。また、保護者について、保護者説明会で「学校でやらないと集まらない」「具体案が出ないと保護者は関心が低い、具体案が出れば多くの人が集まると思う。」という意見が出たので、参考にしながら今後進めていきたい。

〈佐藤市長〉私も PTA 役員と話をしているが、様々な意見がある。PTA の方々からは「我々、役員だけで話を聞くのは重い」と言われるので、その際、我々はいつでも説明に行くので、例えば、PTA の集会など保護者が集まる機会には可能な限り受けさせてもらうことを伝えている。この 1 年間は先入観を持たれないように、市の意見は出さずに、参加者の意見を聞くことに徹している。

また、施設は 50 年以上経過しており、規模によって違うが、1 校建てるのに 40～60 億くらいかかる、どのようにバランスをとるかは、次の段階での課題だと捉えている。

〈髙橋委員〉特別支援学級を利用する生徒が増えていくとのことだが、医療的ケア児が県の支援学校に行かず、普通の学校に入ってくる。将来的にはそのことも考えていく必要がある。現段階のうちから医療的ケア児を受け入れる学校を決めていかないとケアをする看護師の賃金もかかるし、人材確保も大変なので、再編の前段としてそういう考え方でいたほうが良いと思う。

〈岩渕課長〉その課題については、今後、学校規模適正化と併せて検討していきたい。

〈佐藤市長〉今の時点で利府支援学校が受け入れ人数を超えている。昔は三小にあったが、どういう経緯でなったかは不明だが、二小になった。ただ、アクセスを考えると厳しい部分もある。今の先生のご指摘を含めて、教育部全員がそういうことを把握して、検討を深めていく必要がある。

〈菅井委員〉保護者への周知は行き渡っていると思う。私も学校からの連絡を見ている。先生からの意見であった通学距離について、小学校が４ｋｍ以内、中学校が６ｋｍ以内とのことだが、起伏や坂があるので、バスにしても教育部と違うところに力をかりなければならない。複数案が出た段階で子どもたちが通う学校がわかるので、案ごとに通学距離と通学方法を示す必要があると思う。

〈末永部長〉通学距離の件について、去年２月にいただいた答申の中で、「距離以外にも塩竈はアップダウンがあり、スクールバスの導入も検討すべき」との意見があった。重い課題として受け止めている。学校再編と共に検討していくことと認識している。

〈佐藤市長〉自分の時も、三中は港町から通っていて、遠かったのだろうなと思う。月見ヶ丘小学校も大人でも大変なアップダウンを通ってきている。塩ナビとの関係もあるが、あちらも利益の問題、担い手の問題があり、それがなくなるとスクールバスが検討事項として比重が大きくになると捉えております。そういった状況も勘案しながら準備をする必要がある。

〈松田委員〉今日の PTA 役員の資料にも「学校統廃合に疑問がある」「自分の学校がなくなるという不安だ」という声がある。昔の子は歩いて通っていたが、今の子の交通事情や現状を考えると歩いてというのは難しいので、スクールバスの導入を検討してほしい。過去は子どもが増加したため杉小、玉小を作っており、子どもが減ってきたという理由で統廃合をするのであれば、その必要性について市として説明する必要がある。

〈末永部長〉歴史を教えていただきました。杉小玉小がない時代、交通事情が違うが子どもたちは歩いていた。かつ、高度成長時代に子供が増えたことで必要性があって、学校を建てたのだというのは委員のおっしゃる通りだと思います。我々は保護者の方々から、「学校は地域の核でしょう」とご意見をいただいたこともありました。その通りだと思う。学校を無くすることへの不安を持たれている。ですが、我々として考えるべきなのは、子どもたちの人数を考えたときに、学校規模は適正なのかを考えなければならない。我々は学校規模の適正化をきちんとやっていきたいと考えている。この部分を説明するにあたって、子どもたちにとってどのような規模が適切なのかを説明

していきながら、意見交換を続けていきたいと思います。

〈佐藤市長〉私の方からは「塩竈市としてどういう子を育てたいのか」が一番重要だと思っている。学校再編は物理的でデリケートな問題だが、大前提として「子どもたちをどう育てたいか」ということを大黒柱として保護者方にお示ししないといけないと感じている。学校再編の話だけだと経営面の話だけになってしまう。PTA と話すと、距離の話が多い。その辺も含めて塩竈市として「子どもたちをどう育てたいか」をお示ししないと、なかなか理解いただけないかなと思っています。

〈髙橋委員〉学校がなくなって寂しいっていうけど、人がいなくなれば学校はなくなるし、仕方ない。県内だっていくらでも廃校になっている。塩竈市は廃校でなくて再編で、流れは新しいところに集約されて残る。そういうこという大人がいっぱいいて、こだわりを持っている人がいっぱいいるのも事実なので、まめに説明していく必要がある。

〈佐藤市長〉そこが大事なところです。色々な考えをお持ちの方がいらっしゃるが、それに我々が回答していく必要がある。同じことを言っても言い方で反応が変わるので、職員の皆さんには対応できる意見交換をして経験を積んでおかないといけない。市役所は感情のぶつかり合いの中でどうやって説得していくのかというところは苦手なので、経験を積む必要がある。その辺も皆さんと丁寧に議論しつつ、迅速にやっていかないとだめかなと思っている。

〈松田委員〉市としてどう育てたいのかは、しおがま学びの 10 の視点にあるようにしっかり提示している。学校は授業が第一ですが、子どもたちが楽しく輝く、というのがいいところだと思うので、こういうところをアピールしていきながら、規模の適正化を具体的に進めていく必要があると思います。

〈佐藤市長〉10 の視点は最近作ったものですが、そのきっかけは、「どういう子どもに育てたいのですか」という質問に教育部が誰も答えられなかったので、皆さんがわかりやすいものを作るべきだと思って、スローガンを作ってもらった。作ったものも何らかの形で PTA へ示して伝えるというのも重要かもしれません。

〈黒田教育長〉どういう子を育てるかを示すために 10 の視点を作った。私としては子供が大人になったときに自分自身で生活できるようにしたい。定点でいえば、「テストの点数が良い」や「体力がある」という数値で測られますが、一番は生きる力だ、と思う。塩竈の子たちが世の中に出ていったときに生きていける力を身に着けられるようにしたい。生きていく力をつけるために、現状の施設維持では難しいこと、ある程度規模が必要なこと、などを説明し、統合が必要だとうことを理解していただくよう努力したいと思います。

（２）寺子屋しおサポについて

会議資料に基づき、岩渕学校教育課長から「寺子屋しおサポについて」を説明。

【主なもの】

〈松田委員〉一度現場に行き、子どもたちが生き生きしている様子を見させてもらった。保護者や児童生徒も自分で進んで参加していた。参加した子どもたちが学校でどのように変容しているのか、学校の先生の意見がわかれば教えていただきたい。

〈岩渕課長〉学校を離れての事業のため、まだ学校には聞いていないが、時期をみて聞いてみたいと思う。また、児童生徒の追跡は難しいが、工夫をして調査していきたい。

〈松田委員〉たぶん子供たちは学校で寺子屋のことを話すと思うので、間接的にでも聞き取って、情報を取っていただけるともっと広がると思う。

〈末永部長〉学校で通学見守りをしていて、子どもたちに聞くと「面白かった」と言ってもらえるので、「友達も連れてきてね」っていうと、連れてきてくれる。ボランティアの大学生を交えて、くじやじゃんけん大会などのレクリエーションをする時間もあり、子どもたちにとって行ったら面白いものがあるという副次的な効果があった。

〈菅井委員〉リピート率 7 割ということで固定化されていると思う。次年度も 11 回ということでどんどん膨らんでいく方向にあると思う。ボランティアの方が交通費も自費で来ているのか、疑問なのと、お昼の提供については、今の企業以外の他社からの協賛を拡大していければ、と思う。

〈末永部長〉規模が拡大した場合、子どもたちの受け入れは課題と考えている。器としてのキャパシティーがあるので、人数が増えると厳しい部分がある。来年度以降は、一つは公費として予算として作っていく。また、寄附文化の部分で、寄附をいただいていくスタンスも大事だと思う。1 万円程度の少額寄附を募っていくのもよいかなと考えており、趣旨等説明して、ご賛同いただいた中で気持ちよくいただいて、それを子どもたちに還元できれば、とてもよい好循環が生まれるのではないかと考えているところです。

〈髙橋委員〉すごく評判が良い。うちに来る子連れの患者さんも寺子屋の話を一生懸命に話している。行きたい人はいっぱい埋もれているとおもうので、規模はどんどん大きくなる。なので、寄附を募るのは良いことだと思う。アナログだからよい。子どもたちは、デジタルなことが多い中でアナログなことができるのが新鮮でいいのだと思う。

〈佐藤市長〉最初のきっかけは、寄附をいただいた企業と話しているときに、子ども食堂をするなら寄附をするという話がきっかけとなり、学校での勉強に限界があるので、そこに手を差し伸べられないかということで寺子屋となった。そこに先生方に色々なアイディアを出してもらい、間に運動やくじ引きなどをいれるなど、モデル事業の1年目としては、子どもたちにとっても、我々にとってもお互い勉強になった。ただ、場所を固定化できていない。理想としては学区ごとにやりたい。ボランティアも登録人数が34名だが、3名しか来ないこともある。そこは先生方の協力を得てなんとかフォローできているが、ボランティアが固定で5～10人来てもらう状態を作らないといけないと思うので、新年度はそういう問題意識を持ってやっていきたい。あとお金は、寄附を集める努力をしつつ、子どもたちに還元させていきたい、と考えている。寺子屋では年の離れた集団で一緒に食べる光景があるが、他では合宿くらいしかない、これはいい形になっていると思う。今後は暖かい味噌汁をつけてあげるなど、進化させていきたい。

〈髙橋委員〉御座船の関係で募金箱があるが、寺子屋でもつくってみたらいかがでしょうか。これをやると集まると思う。

〈佐藤市長〉気持ちがある人はいっぱいいると思う。みんなの力でみんなを育てるという寄附文化の視点が塩竈市で足りなかった。御座船は職員が頑張って150か所くらい募金箱を設置してきた。それは他にも応用できる。

○その他

〈佐藤市長〉せっかくの機会ですので、皆様から議題のほかに何かありますでしょうか。

〈菅井委員〉パパ友やママ友と話す機会があり、そこで学校行事や部活動がコロナの前後で比較する保護者が多く、コロナ時に制約されているものがいまだに制約されたままという声がある。コロナの前は市P連でもバレーボールの大会があったが、今は一切やっていない。アフターコロナになって何年にもなるが、今後、新年度でもPTA、市P連も含めて、事業展開ができればいいのかなと思っています。

〈佐藤市長〉ありがたい話をいただきました。全体の評価として、PTAの行事を教育部としてはどう思っているのか。大事な話と申し上げているのは、簡単に言うと今年、実行委員を募って盆踊り大会をやります。お酒の問題があるので、学校ではなく市内のグラウンドとかを使ってやらせていただきたい。なぜかというと、昔は、町内会全部で盆踊りをやっていたから、私たちは盆踊り文化を知っている。だが、今の子たちはできていなくて、だんだん縮小傾向でやめていっているところが多い。町内会の方に聞くと、若い人に負担をかけさせたくない、と言っている。焼きそばも昔は焼いてい

たのに、近所のスーパーで注文してそれを渡すだけになった。そうすると、経験していない子どもたちが大人になった時に盆踊りができなくなってしまう。これについて、私たちは相当な危機感を持っていて、市としても、新年度に実行委員を募集して、市が共催か主催かは決まっておりませんが、お盆前後に盆踊り大会をやらせていただこうと今考えております。あとは、親御さんの活動、地域の活動が減少しているのは事実で、それは果たしていいのかどうか、も考えなくてはならない岐路に立っている。もうコロナは落ち着いたが、以前のようには戻らない、それをどう受け止めるのか。無くなったから楽になるではなくて、昭和世代の私としては、このままでよいのか、疑問に思っている。ただ、言えないところに何か工夫が必要かな、と思っている。

〈黒田教育長〉PTA 行事、学校行事の来年の予定を聞いても、土曜日にやっていた運動会・体育祭も平日に実施する学校もあると聞いている。この後、その他の中で国から策定するように言われた「塩竈市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について」について報告しますが、こういうものがでると、ますます休みの日に教職員を行事に関わらせることができなくなってきます。教育委員会としても、学校の校長からしても、その辺りは由々しき事態だな、と思っている。あと、遠慮しないで、学校の PTA 総会などで投げかけはしてほしいと思っています。巷の噂話だけでそういう話をしていても変わらないと思う。私の持論ですが、子どもは誰が育てているのか、と考えたときに一義的には親ですが、地域の人の目もあって子どもは育っている。少なくとも、我々はそうやって育ってきている。それをなしにして、自分の子どもはそういうことには参加させません、というはおかしいと思っているので、私が今できることは、私の今の考えを会合に行ったときなどに保護者に伝えていくことだと思っている。すべて昭和に戻せというわけではないですが、必要な行事や催し物がなくなると、子どもがうまく育っていかないと個人的には思っている。

〈松田委員〉私の住んでいる地域でも、一度子ども会が無くなったが、５つ町内会が集まって一つの子ども会を再結成した。高齢の人が増えたからできない、ではなくて、どうしたらできるのか、できるところから考えていくという方向性が大事だと思う。

〈佐藤市長〉大切なのは火種なんですね。一度無くなると取り戻すのに何 10 倍の労力と経費がかかる。だから、火種だけは残しておきたい。残さないと世代間交流すらなくなってしまう。盆踊りでおじいちゃんおばあちゃんは音楽がかかったら、踊りますよね、そういう姿を見ていたら、子どもたちも踊るようになる。世代の交流にもつながっていきますから、私としては、市議会からもそういう指摘をいただいたので、新年度でまずそれをやってみる。まず、来年やって、その後は学校を回ってやっていきたいと思う。ただ、市が主催するのではなく、親御さんや町内会の方に手を挙げてもらって、実行委員形式で市も関わって、露店や矢倉を組んで、盆踊りの文化をつないでいきたい。子ども会も無くなってきています。色々な課題があります。その中でも次

の世代につなぐ何かをやっていないといけない。こういうことに親も地域も関わらなくなったらどんな街になってしまうのか、ということでもありますから、色々な人を巻き込んでやっていきたいと思っている。

○その他

（１）塩竈市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について

会議資料に基づき、岩渕学校教育課長から「塩竈市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について」を説明。

〈髙橋委員〉今は 50 人以上の企業がストレスチェックをやることが義務になっている。3 年後には 50 人未満の企業にもストレスチェックをやるとニュースになっている。メンタルヘルスでメンタルでも病んで、離職したり、自殺したりする人の比率が多分高くなってきている。国はこの部分にかなり力を入れているので、教育界にもそれが来ていると思う。医療界では去年あたりから厳しくなりましたから、ストレスチェックもいずれくるかな、と思っている。これから企業全体としてメンタルヘルスが重要になってくると思うので、目標値が到達できるように頑張ってほしい。

〈菅井委員〉ストレスは人によって感じ方が違う。長時間労働が必ずストレスに結び付くわけではないと思う。時間外以外のストレスもストレスチェックで測れるものなのか。

〈髙橋委員〉時間労働の軸とメンタルヘルスの軸は全然違う。長時間労働をするとメンタルが病みやすくなるというデータが出ているわけではないが、一般的に、長時間労働はよくないので減らしていきましょう、となっている。メンタルヘルスはメンタルヘルスでストレスチェックを用いて、様々な指標を組み合わせて高ストレス者を判定する。

〈菅井委員〉ストレスチェックを受けたことで個人抱えている悩みを解決するわけではないんですね。

〈髙橋委員〉ストレスチェックにより高ストレス者を判定して、その方々を産業医や公認心理士に面談してもらうような手厚いサポートをしなさい、というのが国の施策だが、お金を出してくれるわけでもないので、企業としては大変な施策。

〈松田委員〉ストレスを感じ方も人それぞれ。多忙感も人によって違うので、早めに気付ける体制が大事だと思う。

〈佐藤市長〉お子さんの状況が昔とは全然違ってきている。ひとりひとり大切にしようと思ったら手間がかかって、先生がやられちゃうというのもある。そういう悪循環にど

う対処していくかが難しいが、しっかりやっていきたい。

〇閉会